

りふる

さつぽろ

テーマ
二択じゃない社会へー選べるってすばらしい

コラム ライター、エッセイスト 鎌塚 亮 さん

秋

56

2022 Vol.



二択じゃない社会へ

―選べるってすばらしい

少しずつ目にする機会が多くなってきたメンズメイクですが、まだまだ自分とは遠い世界に感じている方も多いのではないのでしょうか。札幌で暮らす3名の方にメンズメイクをはじめとした見た目や服装のこと、ジェンダーやアンコンシャスバイアス（無意識の偏見）についてお話いただきました。

赤司 展子 さん

札幌新陽高校の「複業する校長」。新陽高校では「人物多様性」というビジョンを掲げ、ライフワークである学びの多様化に取り組む。ウィーシュタインズ株式会社代表取締役、一般社団法人STEAM JAPAN 理事、NPO法人インビジブル 理事、社会彫刻家。

佐藤 建人 さん(仮名)

北海道の大学に通う学生。2年前に友達の誘いでメンズメイクを始める。最初はあまり乗り気ではなかったが、だんだんとその楽しさに気づき始める。肌が弱くたまに新しい化粧品で肌荒れをしてしまうこともあるが、自分の肌にあった化粧品やメイク方法を模索中。

田中 基康 さん

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 総務課係長職。2007年採用。児童会館での勤務を経て、札幌市若者支援施設（Youth+）では、約10年間若者支援に携わる。さっぽろ若者サポートステーション事業で若年者就労支援等にも従事。現在は、総務課で人事担当係長として職員の研修・採用・労務に関する業務を行う。

―メイクを始めたきっかけと、普段どんな時にメイクをするのかを教えてください。



田中 基康 さん



―メイクを始めてみて何か気づいたことなどはありますか？

田中 化粧って、学校では「するな」と言われ、社会に出ていくのが近づく、「化粧ぐらいしなさい」、「しないのは失礼だ」といった風潮がありますね。採用などの場面だと化粧しないといけないという意識をどうしてもみんな持っています。合わないと肌が荒れたり、ストレスがあるので、楽しさもある反面、大変さもあるのを感じました。

それと、同僚からは否定的な感じは無く、私と年齢が離れている職員でも意外と同意というか、メイクまではいいかないけど見た目には気を遣いたいと関心がありました。

佐藤 そうですね、なんて女の子は準備に時間がかかるんだって思っていたけれど、今は納得できます。あと「男はメイクがばれてはいけない」という思いがあったり、男性の方が髪色の規定など規則が厳しいですよ。

田中 意外と男性側に無意識に求められるものがありますね。

赤司 私は社会に人を送り出す側の教育にも責任があると思っています。昨年の校長になったとき「多様性を尊重しあう学校を作ろう！」と宣言したのですが、化粧や染髪を禁止する校則は人権侵害にもなりかねないとも思い、半年間の話し合いを経て令和4年4月に見た目に関する規則を撤廃しました。先生からの不安の声もありましたが、ルールではなく大人としての経験やアドバイスとして、教育的な対話をしようという話をして納得してもらいました。

自由になったのでいろいろな髪色や化粧をしてくる生徒は増えました。メンズメイクをしている生徒もいるみたいです。社会の慣習からくるアンコンシャス・バイアスを少しでも持たないようにできれば、良い感覚が養われるのではと思います。



田中 メイクを始めたのは、オンラインで研修などを担当しているときに、肌の様子が気になったり疲れて見えるのを何とかしたいと思い、パートナーの化粧品を借りたのがきっかけです。そこから身の回りにある男性用化粧品などが気になり始めました。

赤司 メイクは、高校や大学で友人が教えてくれたのがきっかけだと思いますが、今もシンプルで、最小限のメイクです。

佐藤 メンズメイクは数年前に友達に教えてもらい、始めました。予定や日によってメイクをするか決めています。

— ジェンダーバイアスを感じるときや、
自分がバイアスを持っていたという
経験はありますか？

田中 ビジネスマナーなど

に埋め込まれているバイアスはまさに気づききっかけでした。マナー研修で、性別



ごとに女性らしい服装、男性らしい服装と説明していましたが、そうではなくむしろ、女性のメイクを説明するのと同様に、男性がメイクする場合こんな感じがいいよねと言える方が良く、最近思っています。来年の研修では取り入れたいです。

佐藤

野球選手で、ひげを生やしたり髪を染めていて成績が悪いと「おっしゃれている暇があるなら」と叩かれたりしていて、成績とは関係ないのにそれが正しいような風潮がありますね。成績と見た目を天秤にかけるのはおかしいですし、変わっていったらいいですね。

田中

採用面接でも、メイクをする、TPOに合わせた服を着るのは相手を不快にさせない、相手への気持ちや自分の姿を通して表しているものなので、その本質を一人ひとりが考えることが大切なんじゃないかなって思います。個人的には気持ちはいしかりと相手に向いていて、不快にさせないのであれば、男女問わず、メイクのするしないは強制されることではないと思います。けれど、人によってはそうは思わない人、メイクが必要と思う人もまだまだ途上だと感じます。

赤司

服や化粧、髪型は、自己表現であると同時に、相手へのリスペクトであると教わりました。こういう風にありたいとか、化粧することで自信が持てるという自分のための部分もあるし、良い印象を与えた

い、その場に合った恰好で相手に敬意を示したいといった他者への意識もあります。性別に関係なく、相手に心地よい印象を与えられるか、自分らしくいられるか、ただそこに尽きると思います。でも、そういられない根深い社会の慣習もあると思うのでなくなっしてほしいですね。

佐藤

校則で悪いことと言われたことは記憶に残りますし、学校で教わったことは正しいことと認識されるので、学校やメディアの影響も大きいですね。小中学生と関わりとバイアスが少なく寛容で、僕たち上の世代は時代に取り残されるだろうなと思います。でも勉強しなす機会もないので、今の教育を受けたいです。

新陽高校の生徒さんを地下鉄で見掛け、制服を着た金髪の人がたくさんいるのに驚いて、このかっこいい人たちはどの高校だろう、と調べたことがあって、そういった学校が増えていけば変わっていくのにも思っていました。

赤司

ありがとうございます。金髪だと悪い子なんじゃないかと思える方もまだ多いので、いいねと言ってくださる大学生がいるのがとても嬉しいです。これまでは、髪を染めている子は授業に出さずに美容院で黒染めさせたこともあり、学習の機会を奪っているのではないかと疑問を感じていました。

田中

家庭でもそうですね、親は、特別であってほしい、この子らしく個性を発揮してほしいと望んで、名前をプレゼントしますよね。でも、育てていく過程でほかの人から逸脱しないでと抑圧したり、普通はこうだから、と会話の中で言ったり、特別であってほしいなと思う反面、型にはめることは家の中でもありますね。

— メイクや性別のことにに関して、皆さんから
アドバイスやエールをいただけませんか。

赤司

私はなるべく声を上げるようにしていますが、自分にもきつとまだバイアスはある、自分の主張が全部正義じゃないし、自分はフラットだと言うことによってだれかを傷つけているかもしれないと、普段から気を付けるようにしています。バイアスを持っているかもしれないと考えるのと、そうではない場合で周りへの影響や配慮が全く違うと思うので、一人ひとりが少し意識するだけで社会は大きく変わるのではないのでしょうか。

田中

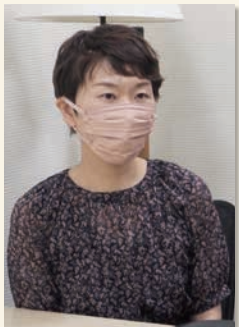
まさにそうですね。自分自身が持っているバイアスと自分自身の主張が時には相手を傷つけるかもしれない、多様性の難しさを感じています。アンコンシャス・バイアスがある可能性を前提としたうえで、自分はこういう主義だと議論していく方が良く、その危険性や、難しさには常に向き合っていくかなという感じだと思います。

佐藤

偏見などは、実際自分がやったことがないとか、その人と関わったことがないというのでも大きな要因だと思っていて、いろんな人と関わっていきたくいですよね。

赤司

とても勉強になりました。「メンズメイク」って言わなくていいようになったらいいですね。メンズがつかない「メイク」って。



■ 赤司 展子 さん

「スキンケア」と「メイクアップ」の

あいだの深い溝

鎌塚 亮

男性に向けて、「清潔感が大事」「スキンケアを始めよう」と言われる一方で、ファンデーションやカラーリップなど「お化粧」を男性がすることは批判的に取り上げられることもあります。その境界や両極端な反応の裏に何があるのか、ライター 鎌塚さんに執筆いただきました。

最近、男性向けのメイクが盛り上がっています。メイクとは、大まかに分類すると「スキンケア」と「メイクアップ」に分かれます。スキンケアとは、化粧水・乳液・日焼け止めなどを使って、肌の健康を保つこと。メイクアップとは、化粧下地やファンデーションで肌を整え、アイブロウやリップなどで色味を変えることです。

中心となる層はふたつ。ひとつは20代前後のファッション感覚が高い層。KPOPの影響もあると思います。もうひとつは、30代から40代の中年初心者層。私もここに入ります。

後者の盛り上がりの背景には、中長期的な「美容と健康」に対する関心の高まりと、コロナ禍があります。筋トレやサウナなどのセルフケアがブームになっていたところに、外出

自粛がやってきた。ウェブ会議で自分の顔を見る機会も増え、加齢を意識するようになった。そこで、自宅で完結するメンズメイクが流行したのです。

私もブームにのってメンズメイクを始めたクチです。自分のブログやWebメディアで「30代の男だけどこ初めてメイクしてみた」体験談を発信すると、性別を問わず好意的な反応が多く、特に、男性のスキンケアを否定する人はほとんどいませんでした。

スキンケアは気持ちのいいものです。誰に見せるわけでもないのに、気軽に試すこともできる。「おすめの品を教えて」と相談に来る人もいました。私自身そうだったのですが、たぶん洗顔やシェービングの延長線上で受け入れられたのだと思います。

一方、メイクアップへの反応は難しいものでした。「マイナスをゼロにする」肌荒れ隠しには興味を示す人も時々いるのですが、アイシャドウやリップなどの、いわゆるカラーメイクには及び腰。「男がメイクするなんて何事だ」と怒り出す人もまれにいました。

私自身、カラーメイクに対する心理的抵抗はありました。初めて薄い色付きリップを付けて街に出たときは、周りの目が怖かったものです。

あるラジオでは、自分をいたわるスキンケアは肯定的に語られたのに、メイクアップについてはニヤニヤ笑いと共に紹介されていました。まるで語ってはいけないことのように。つまり、「スキンケアはOK、メイクアップはNG」と区別されてしまったのです。



なぜメイクアップは排除されてしまったのでしょうか？ それは、メイクアップが「男性が男性であること」を揺るがす行為だとみなされたからだと思います。肌の健康を保つことは許されても、それ以上顔を美しくすることは許されません。美しくなるのは女性文化で、男性が興味を持つてはいけないのだ、ということでしょう。

そのような偏見は、必ずしも男性たちだけのものではありません。「美容意識の高まりは、男らしさを省みるきっかけになるのでは？」「自分をケアすることで、人をケアする大

切さに気づくかもしれない」と期待する人は多かった一方で、「男性はもっと美しくなっていない」と明言した人は、若年層に偏っていたように思います。

セルフケアとしてのスキンケアは許されても、男性を男性としてジェンダー化している構造そのもののへの異議申し立て（＝メイクアップ）は、巧妙に排除されてしまう。これは、個々人の価値観だけではなく、社会の構造にも関係があります。

メンズメイクを実践する人のなかでも、「20代前後のファッション感覚の高い層」の方が、メイクアップには積極的です。世代間でも感覚の違いがあるので、これから時代の流れとともに、「スキンケア」と「メイクアップ」のあいだにある溝も、次第にならされていくのでしょうか。

メンズメイクの内実を「スキンケア」と「メイクアップ」に腑分けし、見過ごされがちな問題について書いてきました。現状をまとめると、「男性が自分をケアするのはOK、むしろ歓迎」「ただし、男性が美しく装うのは、ちよつと……」といったところでしょう。

私自身、メンズメイクブームが去ったあと、スキンケアは定着しましたが、メイクアップをする機会はありません。「楽しかったけど、飽きてしまった」というと軽薄ですが、「男にとつての美しさ」とは何か、まだ分かっていないところがあるからだと思います。メンズメイクも「自分をケアする」側面だけではなく、もっと「変身する」側面が注目されてもいいのではないのでしょうか。

スキンケアは
OK！
メイクアップは
NG？



鎌塚 亮

ライター、エッセイスト。

メンズメイクをテーマにした漫画『僕はメイクしてみることにした』（講談社）では原案を務めた。

Twitter@ryokmtk

もつと 自由になろう!

企業からの
メッセージ

性別や見た目に関する暗黙のルール、思い込みはメイクのほかにも様々な場面で根強く残っています。そんな思い込みを見直し、新しい動きを始めた企業さんからのメッセージです。

ラッシュ

札幌ステラボレイス店／札幌ハルコ店

ラッシュは、新鮮な野菜や果物を使ったハンドメイドのナチュラルコスメブランドです。

「All are welcome, always.」というすべての人を歓迎したいという考え方を大切にし、ラッシュの従業員やお客様一人ひとりがラッシュと関わりと自分らしくいられるよう行動しています。

世の中は、「男性用」「女性用」といった選択肢を狭めた買い物に誘導される機会であふれています。ラッシュでは商品を性別や国籍といった属性で分けることなく、お客様のその日の気分やニーズに合わせて本当に必要なものを使っていただけよう、すべての人に合う商品開発を行なっています。また、ラッシュはこれまでも、誰もが自分らしく平等に暮らせる社会を目指し、社内制度の整備はもちろん、無意識に存在する「当たり前」について化粧品をきうかに考える機会に繋げるべくD&I（注1）に配慮した商品名の見直しを実施しました。

「自分らしさ」について誰もが自由に選び、平等に暮らせる社会がこれからの「当たり前」になりますように。優しさ溢れる私たちのショップで、お客様と会話を続けていくことを大切にしていきたいと思います。

（注1）D&I…ダイバーシティとインクルージョンを組み合わせた概念。「多様性を認め、受け入れて、活かすこと」と定義づけられる。

KDDI株式会社

北海道総支社 管理部長 須田 祐一郎 さん

KDDIでは、従来の固定観念にとらわれず、新しい発想・価値観での業務遂行を浸透させるため、2019年10月に「男性はスーツ・ジャケットにネクタイ」などと全社一律で定めていたドレスコードを廃止しました。これは、どんな服装でも良いとした訳ではありません。その日の業務内容や働き方に適した服装、そして職場の同僚やお客様の気分を害することのない服装を、社員自身で判断、選択できるようにしたということです。

廃止から3年が経過し、社員それぞれが仕事のしやすい服装を自然と選択するようになりました。テレワーク勤務時などは、とてもリラックスした服装で業務に従事していますし、お客様とお会いする際には、その必要性や有効性に鑑みて、スーツにネクタイを選択することもあります。服装の嗜好などから、職場で自分らしさを表現できるようになったとの声も多く聞かれ、以前に増して仕事に取り組みやすい環境になったと感じています。



「KDDI ビジョン 2030」より

Make-up



僕はメイクしてみることにした

糸井のぞ 著 鎌塚亮 企画・原案
講談社

コラムにご協力いただいた鎌塚さんのウェブ連載が原案。ある日、自分の疲れ切った顔とたるんだ体を見てショックを受けた38歳サラリーマンの一郎が一念発起、スキンケアやメイクを始めてみることに。性別も年齢も関係なく、誰でもメイクを楽しんでもいいし、メイクをしない自由もある。毎日を心地よく生きるために、セルフケアとしてのメンズ美容について実際の体験を元に描かれた入門書。

Sociology

男らしさの終焉



男らしさの終焉

グレイソン・ペリー 著 小磯洋光 訳
フィルムアート社

古き男性性の中ではふさわしくないとされてきたことを「男の権利」として提唱。「男らしさ」の持つ弊害からどうやって脱していくのかをポップなイラストを交えて描かれている。異性装をする英国アーティストが、多くの生まれながらに特権を持つ男性(英国における、白人・ミドルクラス・異性愛者)に対して鋭く切り込んでいく。

男性が男性性を考察し、これからのジェンダー論を説くこの1冊、すべての男性に手に取ってほしい。

Beauty



美容は自尊心の筋トレ

長田杏奈 著
Pヴァイン

「自尊心の筋トレ10訓」と名付けられた10個の金言から始まるエッセー。ライターとして美容に関する分野を中心に活躍する著者だが、化粧品の紹介やメイク方法についての記事はほんの少しだけ。「モテ」や「若返り」といった誰かからの視線を意識する美容から、自分を大切に自分で自分を好きになるための美容を教える一冊。前向きに生きるヒントがきっと見つかる。

Sociology



さよなら、男社会

尹雄大 著
亜紀書房

私たちは生きている中で無意識に「男らしさ」「女らしさ」を植え付けられる。50歳を迎えた著者が自身の体験を出発点に「いかにして男はマッチョになるのか」「どうすれば男性性を脱ぎ捨てることができるのか」を問う。

男性性によって女性が苦しめられてきたのはもちろん、実は男性もその被害者であり、生きづらさの原因であったことが明かされる。あなたや周りの人が何となく抱えている生きづらさ、この本を読んだら少しすっきりするかもしれない。

りぶるのススメ

このページではセンター職員がおススメする本をご紹介します。
あなたのお気に入りになれたら嬉しいです。

札幌エルプラザ情報センターを知っていますか？

札幌エルプラザ内にある「情報センター」では男女共同参画を含めた4分野の資料を閲覧したり借りたりすることができます(ご利用は無料です)。

マークが付いているものは情報センターで借りることができますので、ぜひ遊びに来てください。

情報センターへのお問い合わせは

011-728-1223

(開館時間 9:00~20:00)
(貸出時間 9:00~19:45)

札幌市男女共同参画センター相談窓口のご案内

札幌市男女共同参画センターでは相談窓口を開設しています。相談料は無料です。各相談では専門の相談員がお話を伺いし、秘密は固く守ります。
相談内容から浮かび上がった問題は、ジェンダーに関わる課題として市民や行政に投げかけ、男女共同参画社会の実現に生かします。

	日 時	相 談 員	相 談 方 法	相 談 内 容
女性のための 総合相談	第1・3 水 10:00～12:00 第2・4 水 18:00～20:00	カウンセラーなど (女性)	面談／電話 (011-728-1225)	・パートナーとの関係や、家庭における性別役割に関わること ・セクシュアリティや恋愛、対人関係に関わること ・職場や地域における性別役割に関わること
女性のための 法律相談	第1・3 金 18:00～20:00	弁護士 (女性)	面談	・DVや離婚、別居に関わること ・職場や地域等でのセクシュアル・ハラスメントなど ・性別を理由とした不当な扱い、嫌がらせなど 予約受付電話：011-728-1255 ※完全予約制なので事前にお電話でご予約ください。

編集後記

近年、「ジェンダー」「LGBTQ」などのワードを耳にする機会が増え、多様な性のあり方が少しずつ社会に浸透しているように感じます。今号では、様々な年齢立場の方から、メイクに限らず自己表現についてお話ししていただきました。多様性が広まり、ありたい自分で生きられるようになってきている社会を嬉しく思う反面、女性はいくするのがマナーだ、男性のメイクはばれてはいけないという風潮があることなど、根深く残るバイアスに改めて向き合うことになり、少し悲しくも感じました。

人それぞれの自己表現の仕方があることが当たり前になれば、メンズメイクは、ひげを剃ったり、髪を切ったりすることの延長線になり、ごく自然なことのように感じられる日が来るかもしれませんね。

札幌市からのメッセージ..
みなさんもALLY(アライ)になりませんか？



ALLY(アライ)とは、性的マイノリティの方々を理解し、支援する人たちのことです。札幌市ではアライであることを示すマーク「ALLY SAPPORO」を作成しています。

傘をモチーフにしたデザインで、雨上がりの空に虹がかつている情景をイメージし、これからの出来事への期待感や希望といった前向きな気持ちを表現したものです。それぞれの人や思いをつなぐ架け橋となるよう願いが込められたマークです。こうあるべきという思い込みにとらわれずに一人ひとりが自分らしく生きられる社会と一緒に作っていきませんか？詳しくは札幌市のHPからご覧ください。



<https://www.city.sapporo.jp/shimin/danjo/lgbt/lgbtrally.html>

発行月：令和4年10月

発 行：札幌市男女共同参画センター

【指定管理者：公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会】

facebook： <https://www.facebook.com/pages/札幌市男女共同参画センター/377759212234904>

所在地：〒060-0808

札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ内

電 話：(011)728-1255 FAX：(011)728-1229

ホームページ： <https://www.danjyo.sl-plaza.jp>

本誌のタイトル「りぶる」は、英語(ripple)で「さざ波」という意味です。男女共同参画の意識がさざ波のように、少しずつ広がって欲しいという想いを込めました。

